

小児の中耳炎

急性中耳炎と滲出性中耳炎

まえはら耳鼻咽喉科クリニック

前原 良路 先生

小児の中耳炎は、主に2つに分類することができます。その1つは、急に発症し、激しい痛みや発熱を伴う「急性中耳炎」です。小児は、耳管という耳と鼻をつなぐ管が未発達で、風邪などで鼻汁中の細菌やウイルスが増えたときに、耳管をとおして耳(中耳腔)に炎症が伝わりやすいのです。近年における乳幼児の急性中耳炎の治りにくさがしばしば問題視されています。これは主に0～1歳児が急性中耳炎を長期にわたり何度も繰り返すもので、その背景には「耐性菌」という極めて抗生物質の効きにくい細菌の増加という社会問題があります。1歳半～2歳くらいまでには治癒することが多いのですが、それまで根気よく耳鼻咽喉科で治療を受ける必要があります。

もう1つの中耳炎は、幼児から小学生低学年に多い「滲出性中耳炎」です。これは、やはり耳管の未発達により、鼓膜の内側の中耳という空間に粘膜からの分泌物がしみ出てたまる病気です。滲出性中耳炎は痛みがなく発見が遅れがちですが、聴力が低下するため、学力に影響を及ぼすことがあります。普段の生活で、呼んでも振り向かない、テレビの音を大きくしたり近づいて見ている、しゃべり声大きい、などの症状があれば要注意です。

治療は、鼻汁をまめに吸引しながら、抗生物質や炎症を和らげる薬を服用し、耳管に空気を送り込む治療(耳管通気法)を行います。早めに治癒する場合もありますが、急性中耳炎を何度も繰り返す子どもや、いびき大きい(鼻の奥にある「アデノイド」という扁桃組織の肥大やアレルギー性鼻炎が原因)子どもの場合は慢性化し、通院が長期にわたることもしばしばです。このような場合は、鼓膜を切開した後に簡単なチューブを差し込んでおく治療が、治癒のきっかけとなる場合がありますので、相談してみてください。